

スーリールファム通信

「さわやか福祉財団、国際長寿センター共催シンポジウム」レポート

ネットワークすることが地域の力を高めること 助け合うまちづくりを実現するために

2017年1月30日(月)東京、市ヶ谷にある「アルカディア市ヶ谷」にて、公益財団法人さわやか福祉財団と国際長寿センター共催によるシンポジウムが開催されました。

2016年のシンポジウムでは、樋口恵子さんがパネリストのパネルディスカッションなどが、大変勉強になったので今回も参加しました。

『生きがいづくり 助け合いのまちづくりシンポジウム すべての世代がいきいきと暮らせる地域をどう創るか』というテーマで、フランク・ファン・ロイ氏(オランダの福祉法人ラディウス理事・所長)、松岡洋子氏(東京家政大学人文学部

准教授、国際長寿研究センター調査研究主査)の両名による基調講演が行われました。先行する欧州の地域による自助、ボランティア活動事例などが紹介され、日本の高齢社会の方向性を示唆するものでした。

パネルディスカッションでは、オランダの地域助け合い状況を視察した服部真治氏(医療経済研究機構研究員、国際長寿センター調査研究員)による報告を交え、さわやか財団の堀田会長からの質問や清水理事らとの意見交換が行われました。

ポイント

- どれも同じ状況で財政がパンクする前に、「してもらふ福祉」「サービスを受ける」から「する(自立)を支える(地域住民によるサポートなど)」へシフト
- できるだけハッピーになって生きてもらう(←ケアの必要が減る)
- ボランティアは気軽に楽しく、できることだけするのでOK。そんな人がたくさん集まれば、それで十分に役立つ。
- 年齢に関係なく「自分が得意なこと、人にしてあげられること」の情報をネットワークして共有する←これで高齢者を支える社会にすることができる

日本でも、こうしたオランダのライデン市のような「マジック」が可能なのでしょうか?という質問に対し、「日本では道にゴミが落ちていない、道を聞いたら親切に教えてくれる。こういったことが当たり前に行われていることが他国の人からしたら『マジック』です。これを他の分野にシフトすればいいだけです。日本人はもともと親切心があり、高齢者も高いスキルを持っている。きっと助け合う社会が実現できると思う」というロイ氏の回答は印象深いものでした。

